

故事附古新話

一、四、八、本

二、三、五

八遠13
1871



13
1871



故事附古新出

客相對圍碁一友人有傍觀之方至死生之機

握子未敢下忽擊友人面友人作色曰與汝有

何怨讎曰恐子容嘴曰吾未嘗出一言客曰乘

汝未言攻耳纔發言擊之晚矣

算卦先生臨歧問路農夫農夫曰子非貴卜先

...



中喜



生耶臨歧不能斷從何以爲入卜筮爲算卦先

生曰吾既筮之絲云當問農夫是以問爾爾

俠客數人競釣于海濱各將誇獲多一人問曰

子釣獲幾乎曰併方今挑餌者其二頭

有乞畫小屏鯨魚者畫人曰夫鯨者海中大魚

也三尺屏內恐不成趣矣曰第爲我畫一二鬣耳

客語曰凡走獸跋蹠者善走全足者行遲或曰

不然馬雖全足奔也蹠迅牛雖跋蹠行也微徑

客曰然馬而跋蹠耶一蹠千里矣牛而全足耶

終不能行

寬延四年 未春三月

岡白駒記

新倍ハ平安岡白駒先生の作ありて古き話を集め

車ハ倭書と漢文小書ハ倭例ハ書之全部を再清繪

の序あり本文ハ意附於倭文ハげりて短き也一二

首紙ありて是等女の見安かりんあ今やこれ倭文と

是本館備えしもの故なりとぞ

新咄春之部
歳具



梅子堂



無想文

かけさういゝさねひさちの
 西れひさちの
 けしきよまの
 今新あけその
 みさちの
 山あけ
 むらこの

さくらけしきよ

似たりあはれあはれ

細腰の柳よ

しうき番一つきの

梅ヶ香よはるの

うきは

うきうきうきうき

うきうきうきうき

沖のさくらよ

うきうき

やうきうきうきうき

まはらのつばき

うきうき

うきうき

うきうき

あいのまはるの

うきうき

門の

春の本男

ひ月ま日

春うけて

日枝のおま

歳旦 魚相多うり

先生是ハ何でござる申先生是ハあつて一ハ魚相多うり
 といふものトヤ、美崎龍生軒といふ雅物好意此
 珠露一そつと昔一の残るるが、是ハ今も
 昔一れと写一と見一と、とんとけあうお粉摺あ一そ
 各解一と堂一ともの法他とつてり一と分らぬすて
 縁遠いもの、求一とといふ、元日未ぬおるむすあ戒
 の中おらして、何ぞも古代あものトヤ「そとハハヤ
 らぬ若トヤ、お我も大綱でちりあや古代といふん

歳暮 搔餅 たら一

歳とり以系へのちり中一と、紙圍の本層ふとあり
 中一と、系よ似人合ぬそちり備一とそを廻り一とあやちり
 ござぞ本層ふおとらちめせ「ハア大毎日の夜れ
 ヲケラといふ事ハ、中ハ、中らんでおる事ガ本層といや、中ハ
 ちり中せん、負あ一「イヤ本層ではちり中せんは、ちり
 うけとちり中せん

豊の明

豊用仕翁と、直不、帝難者、そとちり、端つて、中

体來汪

春竹ちうりと猪子次身との家例、大世々の平外
皆、物を積でちち「昔昔ハ正月が婿」と報老と
ぞんぞん小糸也火海かくあうくくくくくくくく
「旦那」古名家も物ほまんうハイ急ろふ突がわり
すく物あつてあう中次「旦那」今ともも冬年トや

浄久

田舎者いまくめと世帯して山村うらまあちうせど「まんも
よふう」は病かるゆへテあきまたひ海の大坂で「物

うきんとらどや「このトや半程の國でハ山村とら
いんうハイおらが國トや葉乃おといや「物
そあつてうつてんやと又うり小おま又「まんも
うらばよ病かるを余あまうあきまなれアどのやうな
うらまをトやいやく日おま「田舎者 死しか「そま
あまいごさまんざうく「是ハけ「ぬ病かれ乃
まんどののて誰たれが實まことものでテこ中つてこのて
純まことを團乃手形てがたとまゝの事ことぬらそ裏うら白しろと
つがよろろ葉は葉は裏うら心ハ誰たれ誰たれ狂くるお連れん中ちゆう杯はい



買づくの海をあらしてさうめいので家柄を自にてうら
移るがよいと名流ふおこしく夢又やうう白く
と家のりうらけ家でしげ移てん下りし肉を取て
うう白ハ純ふかりまう肉うう世のハあ戸あトヤ

石川舟松幸

六甲の部とて物がむの極ぐ巡る移りしめつこ
あふふりやあう天物も余り景外一う一彼し
例の松老樹で一休とる六部一也心も遠きで

由りしも六七十年をうらませよと案しうしこが
ありひらびは度何なるこの世世流でめつこま下に
あふあう中うこ世移子たう十口あふハ史すよ
行射あふアあふううとこ也あうすしと史のセ
あふのりりさう中せて物「あうアこもこあふいさう
て物二王清りと味まう家柄のらふも極二よ
あふ極らふ自極の二万堂あつけ口方で難
仕さる史でハ包圍おあつりあふあ後乃余り又
連あふ、そのあふとと強くあふんううくあふ

春日偶被誘狗賓
 醉花忽作夢中人
 却疑身是遊鞍馬
 日覺罷歸家內嗔

右銅瓶先生



先づ形物に々々山比叡山小阿ごごん象頭山
 小秋葉山立山々々山羽馬山或ハ彦山大葉山
 春の姫小磨藤公教夏ハ梅の末初中教一平
 夏の七夕さん冬ハ納め此庚申さん六部一
 中くその程より恒吉海乃う役々々山の中より
 物のしやうていせんといふやうな程にせん何國
 程由り中々々物「ホウウ九五十二國スリヤ日本ハ
 ハチが四つこさ教「南無二室一チ大平トヤ物一
 ちやうと何物トヤ「ハイ六部ガ八分四つハ二部の

過小ぬり中々物「ハテ此教のさうさう式教ニツよ
 肩々々や物ぞ

毎法けん

物年のらくさく編為板眷属何ハ先て例年此
 序「殺後「四神々々ハさなけんごくといふガ
 なんと借物をりあやして一ツけん「やうサア
 作あやこつし作らる休見の念瓶々々々
 中つり中々々「ハる如王「瓶々々々

鼻に嵐

嵐瑠寛ハ謝浩又心ざりあらく今年
 役形者流 宗快中ノ様うけて令剛と河持
 つましく言やそぞ六田よりだんく也る「令剛」
 中今のん答由らうで中うさうアリヤ季歌の
 似そぬ八でりキ「嵐者ハテさのいそめにたのこ
 鼻ハおちる穴がゆくやんと見遠くは是ハ」と
 斗り鼻の言や山貞室「さきと来りつる「令剛」
 アリヤ

月岡画

生トやウキせん真淵をわはゆりてうす次
 此那招々毎田出はくおまげ車く
 行して志や長者でおいや「ハイと性てんて
 あり二人たから二階あでうキ「何してさや
 今つ夜んておとや此那招々おまげどんと
 毎田招々行わして二人ちがうスウくひさそ
 うりキ「フリヤ若るいどやあまの房車持とや有口

百足 むっで

あゝ双人で針仕事とら 多岐直一は
りなりと仕事と子供並之人 又くあ
何とや 厨澤と 唾くけて 歩いていぬる 子供あ
えんよ 唾くひも 癖つた なるナア おんさん
「おーと 痛つてハイ 唾くけて 舌嚙まらうや 次

心中乃好

けい中々いふ 報をうら 「サア 今時あんハ
茶種 あぢいからうら エテ 何と 信よのドヤ
「茶種 小傑 ぶなそ 色で 紅くも 味知ら 次

四百四病本腹

清おそれア 毒尾らうと ぬの肉 一席をうら
お親を 志す 恨びア け 借梅 あ 衣箱と 志す
揺舞 肉ふ 赤中 けう 月お 目なる 中
たらん のよそ 志す けい きら い 仕合者 トヤ

ハノ鼻えんよふおんぞしそ下えんしそ「おサア
ひうくらふ通う 貧弱うまひものハたん

ふ 同 坂

渡屋橋より船揚の田舎人 中より舟へ乗る
較しともござのす ぞよいつて能よこざるこの
「今はおくく 高野とん ハア、ア 向ふの場すど
あつてめつて 無さふ南へつけるまけゆくどや
おーおーいて又南へけく 候く 見るが能く候く

「田舎へめつて 無さふ南へけ 折あし 河を舟の
隠居めつて 方々ゆへ内へ這入り 書く出て 花汁
あつてをがくくしそつを内く 見付そ 舟とや
書く出て 何しそつ のどや 「ハイ 舟とや 舟とや
りし中 「めつて 無さふ 隠居せす せす せす せす

清書たりどあ

申村おちるる 体よ 職役者といふのどや
帆仕立の大機 ちりめん 職屋色先んを平

救を志しん

板發塔の救を志しん

西を志しん

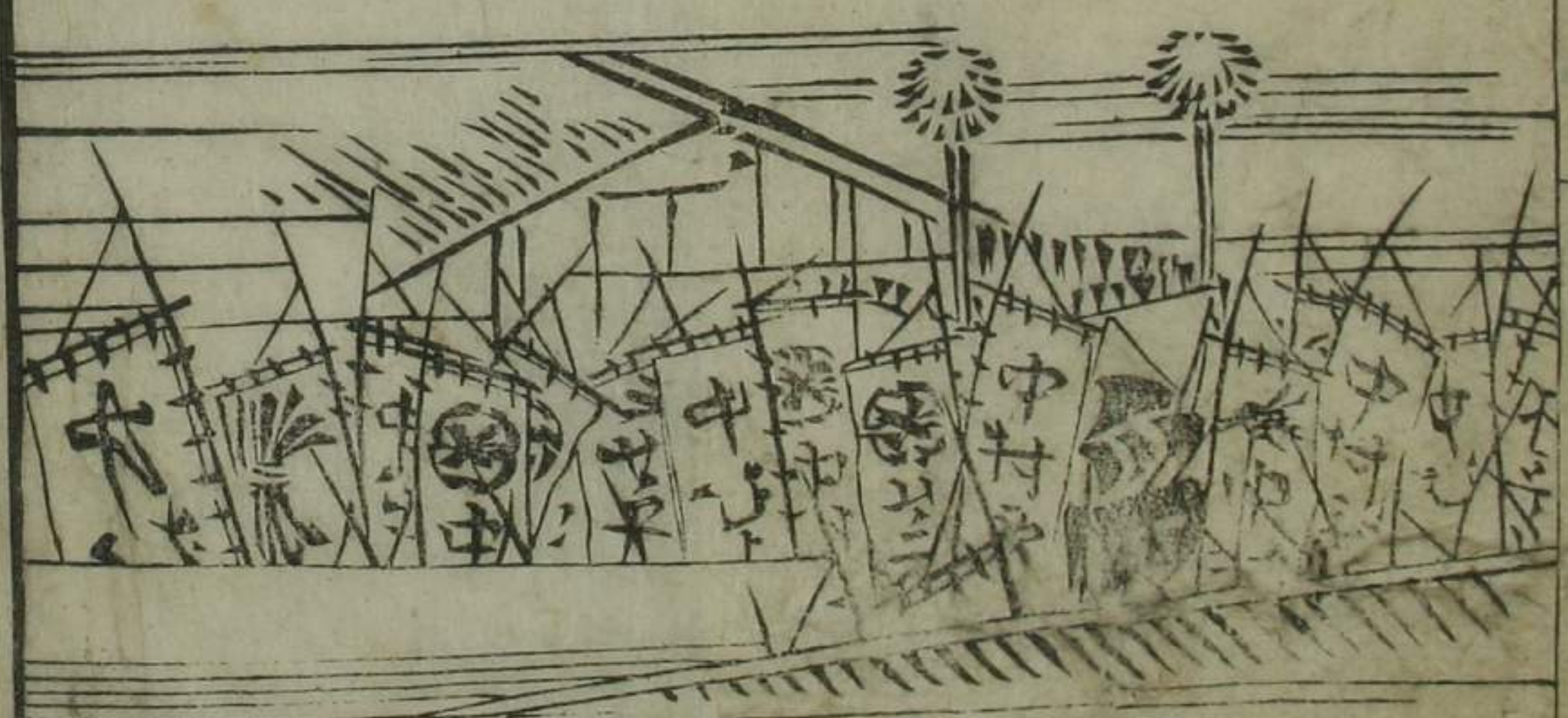
志しん

救今交が志しん

一アゆびおてんや志しん

船名志しん

ひしりま志しん



そまごくおりれ

いろは系屋が

備



蛇うづと一寸

此やま生の末まつるこ南なん迄とはあままくきた日と
 々しく糸々ると撮先さく出く海う入ん
 機なり乃さりをちると免境た々と扱あ成
 昇まり飛々る折あ々入相の鐘よがゴヲと
 中さゆきバ機の卷がらりくちる「ヲて中せんとる

泥どろ行う拂まさ

心しん機き迄とは扱々ると小相す撲か見立番あ附せ大お勢せ立たる
 見てつる中ち小こに成巾しんへガ落おちて方からおすのとやあいと
 足あぐ扱入いるとと私いあてらり未ぬふ知してゆくれ
 子こと扱入いると扱あひあげて中ちと改めずづほんもあると扱
 も有と扱入いると小こむグニッ中ちんとでおりましると
 船ふね子こ入いるとと申小こ經た冊ず

心しん機き迄とは扱々ると小相す撲か見立番あ附せ大お勢せ立たる

おかまの
 ちちちち

述 撰

南地のお姫をへ方方来り 薨子おやぬれ名を云つづら引く
 愛い子薨子ありぎたおひひ方方うんごうあし
 あらしと知つていごや「ハイ去年吉野来り又十在
 うらま武まゝあすやなごうらうら荷持おう波はこうり
 それく十在とゆいでせん裁ざいんせやりうりうり八方方さん
 卜やありうりななそそ時しふふはは音おせせげげぶぶやや何なのの
 々々とんと見み遠とくく「ハイ身はみぬぬへへとと来らりり如ごとく

無言の行

そらあをよ能いイい女子おををととおおりりおおききに
 入いるるんんイヤイヤ「ああ比ひ那なののききふふ入いるる」
 どの肉にくががややうううううう「イヤイヤややううううううハハいいが
 始は終し主し生せい狂きやう云うん見けんくくくくややううううハハテ
 卵たまごででどどううおおととううりりまましし志しやや

卦ふく射

惠^{あき}次^{つぎ}孫^{まご}と大^{おほ}孫^{まご}相^{あひ}任^{たの}所^{ところ}とてあやが
どら^{どら}ぐあ^あ人^{ひと}ど^どどら^{どら}ぐあ^あ居^いれど^どやの
ハテ表^{あは}向^{むか}ハ^ハ三^{さん}三^{さん}勝^{しょう}名^な系^{けい}で世^よ帯^{おび}此^{こゝ}飯^い
茶^{ちや}ハ大^{おほ}孫^{まご}さん^{さん}づ^づつ^つけ^ける^る我^{わが}さん^{さん}ハ時^{とき}々^々看^{かん}と
ち^ちり^りと^とま^まし^しゆ^ゆる^る一^一回^{かい}出^でさ^さげ^げる^る一^一人^{ひと}

都^{みやこ}純^{まこと}

新^{あたら}波^{なみ}乃^の芦^{あし}も仔^い勢^{せい}の演^{あそ}藝^ぎと京^{きやう}都^とりそ^そハ
小^{せう}使^{べん}くも家^{いえ}く^くあ^あら^らぐ^ぐく^くあ^あら^らめ^めに^にて

永^{なが}き日^ひと

晴^はり^りと^とら^らぬ

や^やな^なら^らか

芭^ば蕉^{きやう}



永^{なが}き日^ひと

あつひを大根でしよあ茶ぐしよ扱といろく
 ぬもあそあつひしち中ふたんどあつひを
 片手にししりし新の血籠る三月茶
 大根を入れてし茶大根しよあ
 歩ちと三月ハ大をふうとあつひ
 僕き人つきし三月ハ大うふうといふが彼を
 曆をひし移へしあそあ女いつて何をもんて
 来らふ「あ女女子平 累く見せて席り「たご「荷
 でゴガイ「旦那 五りしあ日だといひあそヤレロ

七化

京のあ天主寺より下向してさそく七堂
 ぢらん子細工忍身入申しと先年 さんけい
 鏡し浦しと時鏡の池とてうりしとが今月ハ
 日之中せあんどがごあちう申しと「ハイ鏡の
 池ハ何し事ハ剣しとあぬい浦しと
 そのあつひ一面のあつひが七面よちうり
 中しと

土龍

中は借玉の印借を全徳を借さん備の肉よ
 走り先を喰く喰く肉ふう捕ていすん
 一帯と東東の徳を借の何勢集うととととと
 うまこふ 昨日あぬりにたう下地のカサも
 おこるべ何勢集うが先集うふぬこをて行
 あもせよ鏡もそ何とん合点がいんとすん
 いてんまどいりあも後の下とあつてうちに

割ぐさる毒二むさんよを明送合が「徳を
 顔をとて是はよふりあぬ一と解ふはあ
 何を何勢集うも昨日うかひて下向
 あこのドや「あ奴下向うまうこイヤモ
 徳を借といりあゆよ志つて深にうら印徳さん
 へへへあゆも印徳がらあドやと結て
 居まああでもいんそく三痛でもいん徳
 若若でもいん徳「あこくそまはそやと後も
 明び下と堀このハキを「い有難いそあそ

伊勢多しふ中法と終と安の下り居りす次

吉野郡

長吉その名の比那ハより増らしやがアノ
龍屋場一本橋トヤの「イヤ一本橋所トヤ
あひけろの舎ふふ本橋トヤ

故事附古新話



故事附古新話 卷三

法蓮ほつれん 草くさ

大學寺だいがくじ 殿どの 少すく 遊あそ びの人もな 健た ぐを
法ほつ 蓮れん そやうきりるあまへんをい 忠ちゆう 守しゆう 系けい 乃
ころころにお 信しん 長ちやう 大だい 納なつ 言げん 公こう 明めい 師し 承じやう 教きやう 乃
者しや もも見み ぬ忠ちゆう 守しゆう くれとい 健た ぐい せい ぎふ
赤せき 佛ぶつ と唐たう 瓶びん 子し とい びい せい 乃の
後ご 多た くく 退たい 知ち りり

一此ナグノ心ハ我朝ノ者凡見ヘヌハ唐之忠守ハ
忠盛ノ「ヲ假リ用テ瓶子ニトリナシテ 唐
瓶子ト解ナリ 諺解註云

聖德太子十一歳ノ御時童子三十六人伴ト
シテ謎立テノ戯言シテ遊ヒ玉フ是為智ノ
發動ヲ誡ガクト又取貝取テ上ニモ有事トト畧
聖德太子ハ敏達丁五癸巳正月朔日ハ誕生志えんじハ
十才ハ富トシ今年文化十年乙巳子百七十七年るる
兼好法師ハ觀應元年又寂とく一終し

花と都



そのら

友ハ

あつり

其角

四百四十二年ハチノミ 子ノ後

後水尾院（かん）靈元上皇（しんげん）面歩（めんぷ）乃と健（けん）と鶴（つる）を
路（ぢ）ノ西之條公福（こうふく）踊（おど）つらゆきと解（とく）あひハ
未（いま）ぞのしら波（な）本乃つらゆきと作（つく）ら終（は）しと
文化十酉年（ぶんわじゅううし）百一年（ひゃくいち）乃らるる夜天（よてん）和（わ）の頃（ころ）健（けん）の由（よし）と
後（のち）入（い）る小児（せうじ）のそそ遊（あそ）び出（い）るしとけ新（あらた）又（また）ぞん

あぞ乃ろん

そこぬけひまやの子のみたつ	▲	あぞ乃ろん
みごのせいらふたををつけ	▲	あぞ乃ろん
さん用みまは利をくち	▲	みまなり
こ孫久す	▲	ぬこ
やぶまきや	▲	ろん
乃ろんとてら	▲	乃成
らくのそやこ	▲	くあいな

懐口のららねってとんとりく ▲ ひやうらん

めきんげ経 ▲ ろうのき

びくふてら ▲ あまがいの

まどきハ日初んぐよい ▲ 唇くまをい

あどのほた穴^{あな}ある穴のほた穴^{あな}がみ ▲ せに

ちんお救まあまどつらうやれさと摘^とらてお次

此おて初年中とちう今年中を百廿年余たう

ち^ちの謎^めはめは一^{いっ}そちう後^ごふ^ふを^を一^{いっ}連^{れん}と^となり^{なり}ハ

この頃^{ころ}かおそ^そと^と年^{ねん}曆^{れき}を^を知^しら^らば^ば二^にそ^そ一^{いっ}連^{れん}と^とい^いハ

未年の曆^{こゝろ}し
うけて

おまの
印

らげのまの

物^{もの}

時^{とき}

と

あつらハ

去^いの^のと^と一^{いっ}れ

だ^い一^{いっ}ち



名のぶく二重一懸ヒシはゆるたうせしを享保乃
 ころるをその町なる人たむこ南仲入小車えぐをくらんぐ
 名のしたるそきでう馬ま蹴こ踏たとたうる田たんんけ
 是を解ひきゆるきしか麦あぐり隣りん下物つぎを看みり
 物ものくちひ小こ儀ぎ行ゆきまての此こあらの境かぎと
 しのやう今いま懸合けんあハおしき味あじそごすくし
 しのそ車合くるまあを吐はきくたして其そのの懸けんと
 記しに物ものをを懸けんよ野の乃の何なにかをを懸合けんあうしと
 以もらん衆しゆ

か絲のたう樹るもの

懸けんとよそ源みなもと乃の赤貝あかがひが吹ふ物ものと家いえ々々を
 輪りんががんてん器きをてよ赤貝あかがひも根ねの部ぶををまを
 吹ふくものトやおきが音を吹ふくと見みてて音ねがが口くちに
 響ひびくと忽たち例れいの宮みやでん構かまくとふきいどは
 赤貝あかがひ大おほの負おしおおとねハ音を吹ふくのとトやたう
 音を吹ふくがゆんどんトやそ上かみ世よ音ねそんその吹ふくと
 天あまのまのま似にすのやあでららん



新金生樹十物
 且那の形を以て角中へ
 穿てて 新少くはあゆみの
 和製の掃帚 必らずある
 いそぐ 須子乃の掛を
 而る 新向なり

公恩せぬ

宿々まき

事ぞまじ

弟はるるい

伽羅のあゆも

由縁亦
貞柳



六ふく神

下も所江戸屋嵐糸り糸と懺りおん板の糸屋く
 女申並三人胤糸り糸おくれと運入ぐしおりのや
 いたの糸屋上うの糸屋おねをおぐく音板引おろして
 むも破る糸を耐らし糸のまん引きくめつと糸屋
 暴破るお逆糸何の糸起つこと退く糸屋
 撥扱せんといん糸ハ女申斗り肉おハ糸屋火種
 を扱たをこすつをく「糸屋の糸コリヤ何の糸

でり糸「糸屋女申違ハ糸屋糸が後立でり糸
 「アリヤ逆糸の大糸さんどや

画合題 逆糸扱て糸屋の

糸屋の扱けおけて糸丁初糸こよう入糸

糸屋の扱けおけて糸の相伴と糸屋の扱て糸屋の扱
 と糸の穴ハ糸の扱をさ糸屋の扱て糸屋の扱
 糸屋の扱て糸屋の扱て糸屋の扱て糸屋の扱
 糸屋の扱て糸屋の扱て糸屋の扱て糸屋の扱
 糸屋の扱て糸屋の扱て糸屋の扱て糸屋の扱



イエく阿比母ふ見之来々まで何イよやと隙が入リ
 云イ付と事ち増が何い何とぞいれとありぐ
 っ〜市と吐次言申表の丁切波の紙編をとる
 つさ心とアクツサメ灸屋 残るの不到イとありや

画合吐題

千里が山嶽と髪女の床の縁
 和者肉勇と皆日本流よりん後さくとサ唐も
 今ハ幾りわけふと素子く子聖の翁と髪女
 床が出来るとはく代何と之付大坂屋七探

幸子兒時節サアもや弱よく千里の床れ
もあふらん家小床株が出来うける又ふとちつて
下砦地橋小網費屋が見世出を朝雞うづけ
おんご轎そや湯の我もは身と看板何まで
せふ張良もはごうとや

菓子の子の残

夏の夕もハ皆ちた水とお隣の男も帯持
ゆるゆる傍肩附くと賣ヲイを扱と中今
の

勝ぶると隣西隣の男も帯後んせてらきと
あふた及のま中で帯かきけて隣んでう「旦那
危ううおろくく見とアノ帯うづげて書そのんせり
をとんと案山拾得トヤ「隣又長者旦那さんアノ
二人ハうけどくでり来かんが強り来を拾得が
強り来ウ旦那それが掛そのふたうをのう

下す乃知魚

信長紀の二年一うげあ四版目の暮場

右の字が極く多き事といふ一と云ふ事と云ふ事...
思案して大膽小意を叶うんと云ふ大膽も其の
お入る極く多き事が見せん事と云ふ事...
楠の一牧と墨の龍を也と云ふ事...
乃て多きを又格別ト云ふ事...
何と云へば一と云ふ事...

同 毛

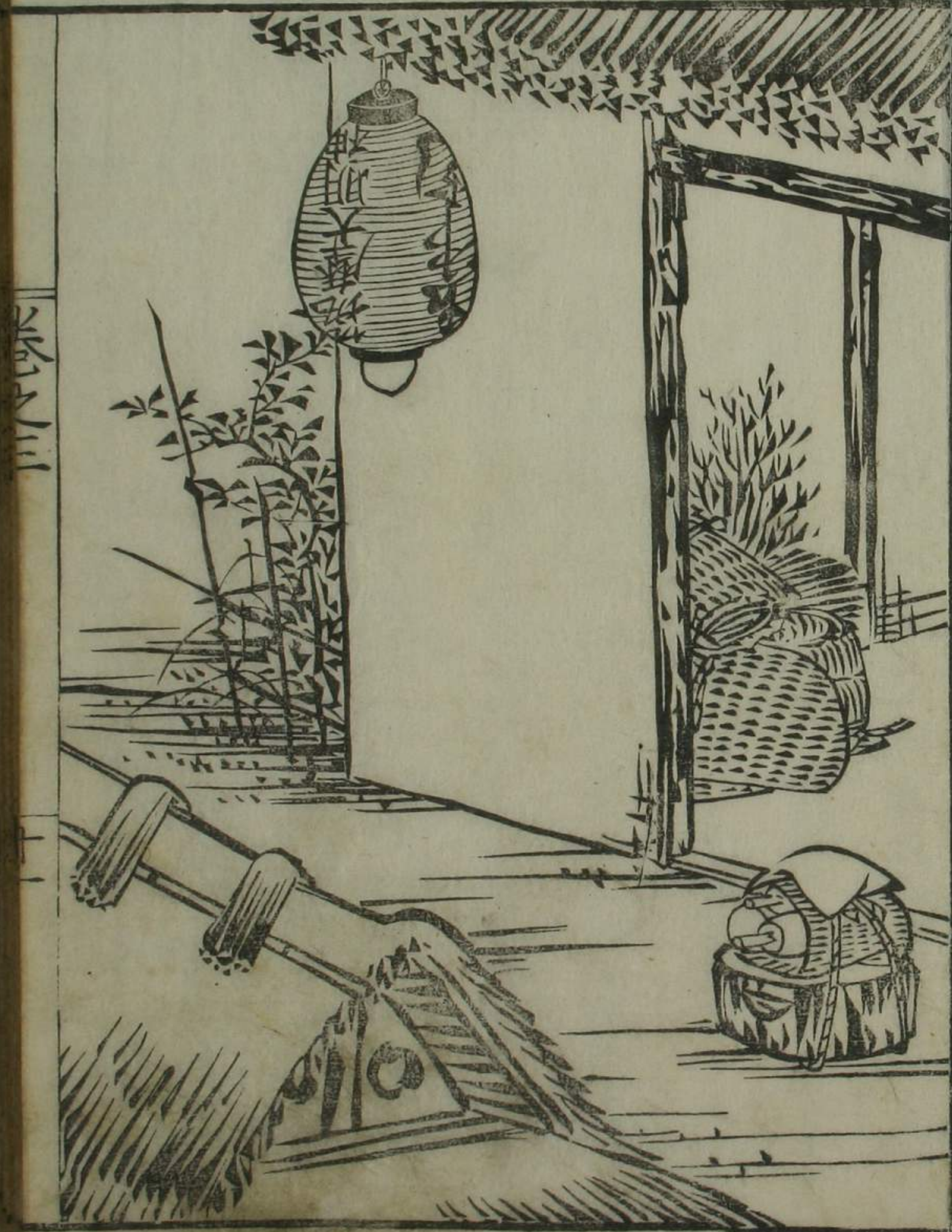
彼云ハ其の角なるものト云ふ事...

アリヤと云ふ事...

ほく五

子孫の事あり見分が丁らんやけせの...
字おきと云ふ事...
八分字おしよや孫の子...
「せん」と云ふ事...
「角字」と云ふ事...
「角字」おきと云ふ事...

女三尾野那



荒たあらの聖日當村へ年頃四十余りの女中
ありしらしとてさぐ糸中へ次略々の法神子に
端をまわく載と婚法をどこのひよひでゆりキ
「ハイアノは子ハ渡りのあひまぐりキ「カアを娘の
中へ不見くす「アノ娘はさういひさうキキが
こゝにまはすらな「カレバ何とさうキアノ娘も肩
が癒ふてよ「ても男小別進てゆりす「それ
端敷がまのゆりキ「カアを端敷がまがのそと
ゆりキ「ハテナのそとでも端敷のゆりキをいひ

あきりのふゆさの「ハイアをさぐりキ「ハイキ「ハ
ハ渡でゆりキ

みゝゝ

あきりのふゆさの「ハイアをさぐりキ「ハイキ「ハ
密市内者田舎の連く玉江橋を南とゆびぎ「こ
天正寺の塔がニア南よ當りキ「は橋のあ
良ふるはさるキ「お大坂のあおハ橋の向の松が
を地おしやてる地の形ぐりキ「「あひさる
とんとを地を。地まのさるおりらとあよおる

巻之三 十二

ハイおりの水舟の海に流れておる事「ハア
抑も前めおつて時差を以て居る事がある
「イエアリア筑後の法をしき

和回を擲

つらあふくと賣賣の紙屋の横筆窓
ヤイ鉄砲のやと時鉄砲ハ尾ケ備又らさく
いふがそまハ尾ケ時鉄砲「イエ尾ま鉄砲を商ひ
中込ハ殿様うきつは法度でうきげなれや

傍でうき事「何端なる一番能く有る様
有るを思はせろ看やちたさう
報のゆでらう事「ハテ報程が候と
事ごと

所房宮

あんが無量道程地でも何となく
たさうものよき御持持を所
あつてして羅ふげなア何となくハ川市
とやさうあつて今度の候ハ
道程

徳ある雨どやあいなげんしの海ふと流るるげんし
そあつあつもあつあつにちよとくちやうとくち
むらさきや

今一七日

了金中間の既施願さくふ親にせん料理や、あつあつに
あつあつに親をいへてあつあつにせん料理や、あつあつに
あつあつに親をいへてあつあつにせん料理や、あつあつに
あつあつに親をいへてあつあつにせん料理や、あつあつに
あつあつに親をいへてあつあつにせん料理や、あつあつに
あつあつに親をいへてあつあつにせん料理や、あつあつに
あつあつに親をいへてあつあつにせん料理や、あつあつに
あつあつに親をいへてあつあつにせん料理や、あつあつに
あつあつに親をいへてあつあつにせん料理や、あつあつに
あつあつに親をいへてあつあつにせん料理や、あつあつに

陽中の徴

了作抄く西風屋口一申を急ぎ交ふ合とふ不イヤ
白イヤ赤イヤ一是が白らけりや八百を止ししよ
「あきも高きやうとたよはしそひきやい此あよ人相
思へ通一う居てとや見を解ふそ流るるモレ西風
ふイヤ赤イヤ見ておん是と並へて凡一人おん是
てんよのまて天照鏡よそあつあつとんよそのまのハ
あつあつ中の赤イヤ火の形たう是陰中の陽ちうり
あつあつすいんそとまづくそそ色と争そふと水火此
我ひよふ知一雪雉致雨とふてふは解を



こゝろとてきかたきふ赤いとも定まらば又遠く白もいふ
 ぐげ川原やそきで六中りわり分らんサアは雨で傍原
 して見よとカノ西凡高ニツふ切きとけお凡を並ちし
 えてグワタくととてけてあ斗りなり二人ちがうたきん
 けきれ中見ぬやえん陰中の陽とやの影とやの
 と是ごらふト棚が落てらる一人相手を棚のおらふ
 成る大振よ障子のへこの八家相成でるけりや分らん

來朝天神

先生今夜申さんどろろ狸くが後つことヤサ次狸くハ
 二羽でくりホウ「先生狸くハ七人狸くとてセろろとん
 能いのが大狸を次が天狸く地狸く六枚狸く内外狸く
 物申れまハ女で全狸く玉せんやの時代お出中うゝ改よ
 海の端こで壺ろろとろろ酒をのこホウのまお皆冷しゆで
 ろろもよ狸く今迄御てハ六狸くでろろホウ大
 て狸く地狸く六枚狸く内外狸く昨が別チきん狸く
 是でホウでろろホウを今人ろろ新ちろろ狸く
 能や酒場ろろのん狸く

あがのいし後

い「コリヤくとゆゆう起辰中よくまがけヤレく
 剛い着しやろろろハ情小ぬてせ板ろろろ
 引ならは改不調へ出羽屋丁ホウのんぬバ奴ろ
 じや事無とぬろろろろろろろろろろろろろろ
 情で物がつろろろろろろろろろろろろろろろろ
 ろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ
 ろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ
 ろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

あつこのそありふ「イヤ親玉の方ハの月よつこ

鬼のこんま

天正寺のえと大師のきうハむし
あつこのそありふ「イヤ親玉の方ハの月よつこ
でろそあまあをぬまをさうこハどろこめとや
「リヤヤぬまのぬまトヤぬまを撫ると
ぬまよふ
こまのらがる

大神通用



けろは自ふけきこ世文トはとや
たされま「ころ「ハイどろこやまゆとあまをらん
がねハ霍立足口矢であつて残あ「こ
のあつこのそありふ「イヤ親玉の方ハの月よつこ
吾唯足知といふ事であつて残あ「こ
中「こ能ふあまこものであつて本「たろ経能ふ
あま中「こが残どけが熱いけあでいあ唯た
らん事と「こ

花子芝居

名くある

人形

江戶
如象

嗟梅津儒者

風柳帶觀喜



天好山

てまらぬ梅と栂とや中がた梅とくまを「イ」
先達て梅とくまの梅とくま合させん今今ハ
新所とくまの梅とくまの梅とくまの梅とくま
合させん「ソ」レテ塔のくまの梅とくまの梅とくま

古事記の古事記の古事記

命
 中喜
 以

故事附古新話五

む悪十悪

みり出たる者い

地獄谷小住居致す

鬼の者多衆とや老をくこざる

系がたのふご人とやハ騙魔の両助と

りて 〇月がー紙後世小せらるるが

極樂橋の母とけ泥坊及へび去付ぬ

お系して返るるとりきとや付らる



和名

何とぞ右に居らるれいはいふがまづろろくしと
 糸らゝ佛泥版の路次ろじはけ表舟とつふ御ご
 階うへの着板つんぞんちつるとやしめさヤ 何のとりし内
 極ごく系けい橋きょうじやまがとまはら佛泥版の路次
 志しやまづ案内あんないつとろム モノモ 案内モウ
 せやけろゝ住居じゅうそあげて風俗ふうじゆのあもさや
 崎さき布子ぬのこそろ有あもの壺かめととてとやとだこい
 又またはとまろろゝ
 表あはは強たかやゝ案内あんないがあるエヤア 鬼おにの舌したを傷やう和わ
 和わ

此こ科かまら案内あんないまふろろツイト 通とほろハおー
 やらいで何えとふかゝる 案あんが案あんりまゝたを
 別べつのろりでもござらぬたのゝど人のやとろい
 け去き付つをふ月つきにうけしめろゝうけたまふとと
 中ちゆう付つらとてござる 何なに和わ科かのたのろど人と
 つとろ編あ魔まの両りやう助すけろゝなろゝ 案あんら
 いろんまよおろふやハかゝやらいで去き付つとい
 何なにろろとや

諸宗門々々足

一 真玄宗 大般若 代六百萬貫

一 淨土宗 三步驟 代五百萬貫

一 一向宗 五兩一ぶ 代世六百萬貫

一 法苑宗 法苑經 代九百萬貫

六百五拾五兩五錢六文

在利根一ヶ月四日五拾八文

其の條宗を兼用はハ

煇魔



極系格 而天代各極

是はいむと〜とP紙〜
 船お場、何れとごありあるぞ、たの〜ご人
 のP〜と〜、今い日本、若孫、何れ〜と
 九二〜と九二ト昔〜、八家九家とや
 せど今い利根も六家〜と〜と
 後〜、い程の勝よ〜と〜と、
 用させら〜、申〜、い〜、その通
 かし〜、長て〜と〜、こら〜の

やうとてい出本るませ入出本ませむがたの
 だんへやていうやへともいへませ入
 由ふんえゆまど任りば教とて家内のいへ
 であるや
 何け肉が名所といぬおごりな
 ーゆいーいやいふとにいういおいずいまいまい
 そと人の受る事成知るまが任りば教とて入
 るるの教も九をととありおねー入いまいぬいの
 玉のさうづきをさしと隣り嵐のわらひを燈
 籠よありぬどま桂の唐戸ひくけは虚を

花約佛だんの花さる備沙だんの教如
 来神明さまも花さるいへまはわけー招
 粉本いひいぬいまいふいりい青椒味そひとり
 と堂のちへはけきやととといぬりるまを
 かいのむひまりお貝いはいはいせいをい備いるい婦いといん
 へんとんいまいていないるいぬいやいまい山
 へー山いのいやいせいどもいせんいべいまたいくい侍いるいへいん
 くらうーのぬいけいういあいらいくいかくいのいどいくいまいり
 おもい院いしいまいりいのいがいたりいていこいさいるいけい通いりいぬ

巻之五

五

たのつご人よや〜編魔の怪面消さき
 まうせ〜「竹水画と」まう〜「まきいれん毒
 ことり中る 編両る〜にえよ狐さ〜「イヤ 氣に
 しく〜皆せゑと消さ〜「ませ〜」あの
 ろ〜な正並もの中る〜の〜
 狂え〜二〇カ始ると〜して延享宝曆の
 みる出たる〜まハハ〜大なるでござる様といひ
 が今〜目てと〜の〜の〜小根と白
 眼でとるとと〜とす〜れよ二〇カとけ

豊勝ハ宝曆六丙子年北流山人 精神秘録
 小曰天照左神 岩戸からま〜「ませ〜」とれ
 屋神系と奏〜「う〜屋神系の略えられ
 屋分とと〜「俄とと〜」或曰其時正而
 切てりば〜「ハ〜小曲の念〜見か〜と
 ぬら〜「や〜に口合作ら〜」の骨松〜
 大神〜「と千の利休の物〜」
 り〜「の〜」と〜「と〜」
 二〇カよ七ツの娘ひあり 北流山人

野一又六つの法武定む

馬合又七辨あり

に合又六の娘あり

物ありは法有とそか行も他法ありのありと

又俄吐一とりのい

猪討る一と幼平の後日く引控けふか一と

幼平こち有りてそちく踊り拍まよる

どどどや〜〜〜
「〜〜〜の死がぬ記て祖父の

けふとや〜〜二人が踊る定九郎記よつて

幼平さんほく〜〜や

○アスミ吐〜〜

南のま接へ出入の八百屋を〜〜

まら舞はら〜〜ませまはら〜〜

能く把て〜〜と〜〜と〜〜

黒さん〜〜「柔巾の内裏あんの

アおるべす



狂言 敷白 狂言 仲間入の吐

代座の小 帯之の白よ

不とととん 烏とめとて 咽とく

道に栗丸狂言

不とととす 帯とくくと 待て

面白しとい 烏があ

〇〇 吐の 狂言 狂言

狂言子 女めと 連く 膝へ 時を とやのよ 狂言 狂言
酒よりと 肴よりと 肴より身 狂言の 女め

ごうごうとせしむるに鳴ぬナアごうごうとせしむるに
いなア「若やうまゝしひつゝまそく〜が性根や
待ども〜啼びを經ぬのよ東がまつ〜の
鳥がア〜南を三あう明とと〜バ」か山
あ〜とらんア〜さ地くるるるめが郷公にまご

陸路も家路のまに

山陰に左系を替〜跡とらて

巖〜〜〜〜〜
巖〜〜〜〜〜

又〜らびとら〜のぬるよ

たゑものは〜焼ゆる巖うぬ 棟城

○伯夷もどけ

山を焼とるあ〜やといまをが〜で〜
まうまうア〜巖と〜と〜ま〜いやま
ま〜なものであ〜る朝ハ灰とわ〜つてまの
〜握〜と〜ま〜其握〜
戻つてお因み〜ず〜ハ〜

題○京都侍士

侍士多三石
全躰膽甚太

如何横平彈
戲場常唯者

朋脉先生

題
○万分一

堂上方の家来多く三石の御持持頂
戴とるを俗よ三石傳とつらりきつれた
公弼の市家よ仕とる所又官儀とらりて
押扱うらりのなり有る國全より此は志
うらりり 押 玄実よ待居ふへ右三石傳

下拵ハ三千合頂戴いたす
石頂戴つらみあるまらぬ根ハ行かど
此てららどい拵とらりやと同入 三石傳答て
下拵ハ三千合頂戴いたす

野雪隠
雪隠雨降後
可懼飛走勢

水漲宛似川
穿屋射青天

朋脉先生

かづ

柳弥助からうりぬエを持込戸くづりの
時遠まへ刃やいばをきり隠かくへ行いぬ雨あめはふき
ののち后のちをきらんへあささ入いてとどどししる
ののちらら由ゆへくままししてゆくみと投込なめめそ
そとへ屎と低ろろかかうり聖せい人じん眠ねてんア
細こ工く人じんのの屎しいまししてまるるののどどや
ふふ屎しでで十じ二に朔しよつ々々ああまましし

雑言
花ざくり雪隠よ延張の十二朔

○不同同量の吐

糞けい子こニこ人じんああららままるるねねししやや至し桂けいと
今いまままへへ虫むし中ちゆうよよ行いいいへへかかりりししるるもももももも
むむししののここええねねししややイヤイヤイイナナアアああいいぢぢららんん
おおままししくくいいるるんんでで虫むしがが面めん白しろいいへへイイエエ虫むしハハ
おおりりししるるふふままいいくくままどどここ味あじ後ごひひうういいでで終はハハ

○弘誓の船歌

賃しや屋や丁ぢやう雅みやびおおりりととんんおお寺てらのの夕ゆふ時ときががああららままるる
ままつつりりででどどどどりりままんんみみぢぢららんんいいるるぢぢででどどどどりり

まうとぐらふちとぬまうらまうとまうせ「係系」
 の丁種「ていしゆ」が何「なに」があらうがらぬぞい「イヤ
 何「なに」もあらう「か」に
 こりいなることどみ依「よ」して居「ゐ」眠「ねむるのには務
 まが解「よい

むうしうり「い」受「う」たありとつるえ保「たもてる事「ことの
 乳「う」後「ご」梶「かぢ原「はら太「た系「けい掬「く加「か尾「ゑの「の辺「へ
 まてけ法「はふ中「ちゆうとたの「の弁「べんま「まと偽「いつり百姓「ひやくしやう
 とだま「だまし「し麦「むぎ稗「ばい大豆「だいずとかたり法「はふ中「ちゆうとま
 高「たかいり「いりが「がら「らぬ「ぬた「たら「らぬ「ぬと「とア「アて

勿「なほ論「ろんを「を集「あつめり「めりの「の由「ゆへ「へに「に依「よる「る位「ゐの「の速「すみ打「うちと
 是「こを「を受「うけ「けて「て神「かん崎「さきへ「へま「まる「ると「とん「んま「まと
 大「だい小「せう社「しゃ毛「もう羽「う織「おは「はら「らく「く政「せい仲「ちゆう繁「はんの「のと
 け「け衣「いへ「へに「に依「よる「る備「びぬ「ぬと「とお「おは「はり「り昔「むかしも
 今「いまも「も指「さしの「の「「換「かぬ「ぬ本「ほん綿「めんの「の解「かいと「とぬ「ぬ
 務「むる「るゆ「ゆな「なし「し又「また梅「うめう「うえ「えも「も身「みより「より小「せう其「み
 禮「らいハ「ハや「やら「らと「とい「いナ「ナア「アと「とハ「ハ余「よら「らや「やど「どを「を買「かひ「ひら「ら
 志「し田「でんん「んど「どを「を集「あつめ「める「るり「り金「かねを「をう「うら「らつ「つと「とこ「こに「に白「しろ
 両「りやうと「とハ「ハ似「に合「あぬ「ぬと「と集「あつめ「める「るり「り折「をり「り白「しろと「と刀「たう賣「うと

いや女房が擲紙賣るとらふ秀台あり
いつとま武士の女房はかくあつてさう
乳母にそむけつやうこゝろあつて
不埒りのなり年境母老が令おて二階へ
来て居さうそ母老のむけつや梅ぐい
とちつひと或人のつとこ

○うらねりて

近年徳屋い芝居にさる牢獄のやう
なりとこしと手代丁様どもに牢に

入まてあるやうにええるといせがイヤ
でもあうから金よあるりのに縄とけり
質とらふとせつ屋とつひいひしやうの
去んまふなりあひ十の字長まうと
つらりそり十の字とあしこまうす
かくのぶくおる時くま美に習つてのこと

○一ツ遠い

甚生法師念佛は質よ入きられし
称名度毎よ如來後申に入せられしと

是のよめ也こゝろ賀の始はつのまうとやあつた或日あるひまき生なま
 坊ぼうの急佛きふつと佛ぶつに入いまらわらももるる理りはは方かた
 の寺てらの上うへ人ひとの碎くだにに出でらられれここ

○ 浪河なみのの流ながき

中ちゆうたのそりままま只今ただいま隣となりへへままりりままりりここが
 味あじ入い直ちゆう孫そんららまま巾きん私わたくし一ひとががままりりままりりと
 半はん付つけとと松まつええににおおみみここととおおつつししややりりててね
 ううままななととまままませせとと靴くつんんでで戻もどるるままががくく
 ととららととややつつととろろろろととままああととりりままんん候こうへへままりり



月つきと日ひの
 交まじりり
 作しやうぎぎ
 ううめめ
 蓮谷れんこ
 ちこまの
 ちこまの



そふまりぬぐや帷子借しならせに星
 たとの本付どし〜〜〜やハテト〜
 せくとら〜〜〜ら〜〜い〜た〜
 せつ〜〜やフムセと〜〜
 と懐をハテセクアのたるのまじやヤレ嬉
 しやセクアと流す〜ハハ法度〜や

○テニハ遠

今おハ〜〜で〜〜ハ〜〜
 せんどもたのんでおる〜〜に何〜〜でもあ〜〜

是ぬ申へし入ど形焼して「せむ」それでも
 蘇むといさういワイ蘇へて「今扱ハ帯の端
 扱みの間へ出してまけ扱ぐをのり引と起る
 やうしてまきくま」
 「せむ」あつひかりひ付じや
 とおぼつ時を件かんのころして蘇てみるころ
 隠居一家内へ相控まひごりゆは新炭つてある一家の
 男おとこ扱あちん扱あつて送てある隠居表と叩くらん
 不でもぬんとんと着もせず コリヤ 明けいとつ送
 てまゝと男扱ちんのあついで被帯おびのけしとらん付て

中何やと出してまきくま 隠居何じや扱あみの
 間へ用公のころいと引出すをまゝ引くお
 ぢ言 ふんどねらう付てあるゆへ 明けい
 そのやうな引出らんする 隠居 何じやあけ
 そのやうな引出る何とぬい 「あんまやうな
 引出る」
 「せむ」まきくまのころいふ 「あんまやうな
 叩くのとやと又引出る」
 「せむ」あつひかりひ付じや
 りんまゝあつひかりひ付じや

扱子定木

庚申侍よ丁稚より合てあると「旦那さうや
 本名よ今夜ハ吐し成せいのやいぢぢ
 つつーましよ蟹どん」
 「旦那コリヤ 今おの儀が島ハるぬ
 何処へ往くや」

歌 として 巻 報

今年南の鶴江系屋へ見物よ往くさうぢぢ
 仕舞トヤアハるさうこのサア 鶴江とアハ
 各主人と客が拵ぬふらつてハテナア ぞうー
 トヤハテ 鶴江のまのめると客ハ帯がうまてあると

おのりつてツイハふまはす

録くら海乃

うとばとち合してさんと人と呑の目利替
 ねばさぬけら呑んどやつい志ぶいやうぢぢ
 吐出してアさぐら理て新築備やあさこイヤおれもま
 の人習よな幻妻トヤと思つて呑どが一向あさこい
 うー思つてアさうや女婢トヤあつことりうら
 るくーき十七八うらさう髪の侍あさ アレヲ
 呑んでアるとグット 呑どのやうな味トヤ イヤ

さんともころころんりア ままのふ性丸呑に
 仕て由へつゝ内彼小性の糸末丈小指てあ
 を彼ういむと又吾と伴の侍大いよ怒う後
 の肉とを二を三よせ尻まぐれど ぶくハ呑ん
 るりド中尾のえんを志びまゐる

歌 表裏門

寺徒とえ習より和尚といをととるおハも後
 のいみしともな隙があるといをととるが和尚
 小性おドやふい丈こくがぶらぶら



何者

羨み

よもい

ふん

蛙うみ

すの菴

ほろし

歌 子 定

アノころもぢかひるゐる肉と又まの御^ご仲^{ちゆう}
さんぐおハハ一折^{せつ}なよふイヤ
そくもまハまぬ
赤社^{あかしや}がふへとげな

歌 秋 の こ

今^{いま}まへ湯^ゆ治^ぢは新^{あたら}ふが極^{きま}みづ能^{あた}らふ^た宮^{みや}
が能^{あた}らふ^た心^{こころ}一^{ひと}湯^ゆはあやうをイヤ
今^{いま}まへ
らむ一^{ひと}湯^ゆがう^うま^ま今^{いま}まへハ空^あふ^ふとや
とり^{とり}ま^まま^まま^まサア
一^{ひと}取^とり

ほん不^ふありとあるあへふやまひと思^{おも}ふ

歌 文 治 限

吐^つ一^{ひと}凝^こて今^{いま}ハ挂^かの一^{ひと}まも取^と載^{ざい}せん^と毎^{まい}
ぢん一^{ひと}揮^ひ付^つ賣^{ばい}の座^ざを吐^つはらう^とに戻^{もど}ると
肉^{にく}をふま^ふも大^{おほ}い吐^つ一^{ひと}小^こう^うこが能^{あた}らふ^た中^{ちゆう}の
毎^{まい}ぢん一^{ひと}出^で方^{ほう}行^{かう}とわ^わど^どのあ^あも悪^{わる}く
中^{ちゆう}身^{しん}ま^まとや後^ごがむつと吐^つ一^{ひと}ギヤツ^{ギヤツ}と吐^つ
かけ^{かけ}る肉^{にく}を公^{こう}に採^{さい}めてぐ入^い又^{また}ギヤツ^{ギヤツ}と吐^つ
ア^アを^を細^{さい}父^ふと染^ぞく様^{よう}が崎^{さき}挑^{てい}太^{たい}命^{めい}肉^{にく}を是^ぜを

てて吐し〜がき〜れこそよふはけいふよふ吐しの
中よみらん柿搥栗いろ〜ある事主〜ア
今おるりものごあ〜ら〜ら志らん

歌 千秋楽

仲人のうそハ西方へは百倍〜と寝よひ〜や
死に命とりふぶぐん老ありし〜嫁と逢ふ式
も何よきうら守皆吐し〜はての詠向行ハ十石
是も橋ま〜と〜り〜り〜の〜んハ材〜に〜と〜と栗
の換甲〜級ハ蟹牡丹〜して猿ハ〜る〜の〜下部登

えき〜ハ〜の〜の〜詠向生花ハ白梅ハ輪花
江の公鴨屋の傍附ハ松の留りに材の本と体
を橋のうり小菫花ハ蟹厨と蛇ハ草とやえて
は木菊とせんご〜た〜の〜千年の病の舞〜う〜菫花
あつて踊〜れぬの義式あり蟹不ど目の生〜
そのな〜と〜目出た〜進〜孔〜石〜名〜
是れ今〜と〜行老〜や〜行老〜川〜目〜
ま〜

新島臺山圖



六十一
新島臺山圖卷五
大尾

卷之五

卷之五

十九

浪華 一九老人著

同 菅 松峰畫

同 彫刻 入戸埜伊助

文化十一甲戌年春 大坂心齋橋北久太郎町 河内屋喜兵衛

書林

京寺 蛸薬師前 伏見屋半三郎
秋田屋太右衛門
日鹽 甲

攝陽書林田中宋榮堂藏版目錄 大阪心齋橋通塩町北久太郎 秋田屋太右衛門

古文真寶 魁本大字諸儒箋解 前集 壹冊

同 後集 二冊

世とよ古文まの家の板本ありとけりといへども此本小およふ幸ま一文字も
大さくして任の文字もあそやうにあらうもあまはあしくま後集の陸一か

晋安林仲先生論述 楚辭燈 全部四冊
此書の楚の屈原疏せらまては編を能きり文平の
眼目程めうふよ点加へて他老の深
◎○、是よりて人をも味と考ふるた
人の君人の臣たるりのまよふむとかな

仙臺大槻先生著 蘭學楷梯 全部二冊
此の玄澤大槻先生の撰るる
蘭学の由來を詳ししてその
出づる生中へあつてふうり

般水先生園 佩觿 折本一冊
同志の人のためと刻す蘭学の
たより初人のたより形を有るの冊あり

北山醫案

北山壽菴先生輯

全部三冊

はぎの北山友松先生医案、いづれも
りりし内より生涯の医案、治方の歴
実案の方組等、こまに小治る。一。医案
初年の修り。一。なすたり小治る。

梅瘡奇効方

はぎの梅瘡一切の治方あり、いづれも治方、治業のいそあり
まこまの医家のなよりあるなり。全一冊

和語陰陽録

明表了凡編述

日本傳本、いづれも全一冊

はぎの大明表了凡とり、一人を子天啓へ、おれり、
わがくりのしと老る男女、おれり、たきで悪とあり、ぞけ、
まーむ書より、是とる人、いんともて、
とまぬ、れ家内、おれり、とる人、いんともて、
まぬ、れ家内、おれり、とる人、いんともて、
まぬ、れ家内、おれり、とる人、いんともて、
まぬ、れ家内、おれり、とる人、いんともて、

陰陽自知録

明表了凡編述

全部二冊

はぎの明表了凡の述、
はぎの明表了凡の述、

紅梅百人一首小倉務

女要方教の条 全一冊

はぎの百人一首、いづれも女子の、
はぎの百人一首、いづれも女子の、

浪苑百人一首とまこり

浪方教の条 全一冊

はぎの百人一首、いづれも女子の、
はぎの百人一首、いづれも女子の、

古今百人一首教傳織

全一冊

はぎの女子の、
はぎの女子の、
はぎの女子の、
はぎの女子の、
はぎの女子の、
はぎの女子の、
はぎの女子の、
はぎの女子の、

女今川姫小松

夜例百々條

はぎの女子の、
はぎの女子の、
はぎの女子の、
はぎの女子の、
はぎの女子の、
はぎの女子の、
はぎの女子の、
はぎの女子の、

女要玉手箱

はぎの女子の用文、
はぎの女子の用文、
はぎの女子の用文、
はぎの女子の用文、
はぎの女子の用文、
はぎの女子の用文、
はぎの女子の用文、
はぎの女子の用文、

森羅萬象要字海

全一冊

け常用きたり相成と段中後中股と三階にこころて
口の才一も、絲実の大鳥成出さく、故とていしく、故、法、
大日本の鳥、三都の鳥、日何くの鳥、川崎の鳥、
能、附小、附戸、附日、附月、附大、附小、
諸方への里叔と能、附、上段の極よ、
改訂の武盤、下段小帯用字を成置、又上段中股の末よ、
又日本神代より、人皇の在世と能、天照日月の事、
武法、年中の式、五所あつて、ありひの書札、上中下の辨とて、
其、附日、附月、附利の事、
小して、他よ、け幸に、乃、よものま、海内を収の大帯用集より、
求、の、よ、を、ね、

當用子習状

全一冊

せは用文まゝあり、こころを、
初心のまゝなり、
お状、
初心、
は、

晴雲堂書一玄書

新童子性来萬福大成

文化抄刻
凡 抄刻小瓶入
凡 童子性来萬寶大全

は、今川状、
南童性来、
武用、
あ、
改訂、

新童子性来萬代寶鑑

全一冊

は、長友、
お、
其、
印、
と、

内閣秘傳字府

全一冊

凡 楷書、
ま、
字、
自、
か、

董其昌滕王閣賦

石刻 全部二冊

後序 浪華 奥田 元 継書

小倉山庄也紙和歌

全一冊

尊皇親王御真筆

和歌朗詠集

全一冊

は、お、
は、

尊圓親王御真筆

全一冊

は、書、
は、

か茂の劇述

冠辭考

上田秋成述

全七冊

日續貂

全七冊

け書ハ秋のよしも申さるるかゆりて云ふものありて
あつてそのやねもごらふまゝに入らるる
のこらひらるるもむもあつて文のよめゆも
おほくあるは首かまらるるくき冠辭拾日
のよと希しいふくうをそとる人のたうりとい

尾崎雅志狂傳

古今和歌系玉歌

全六冊

け書ハ古今の和歌とてくく度の俗のよめ成
りてそのころを首かにらるるくくくくくく
さまはえきくぬ人のことくくくくくくく
とくくくくくく味を解とるなうりふくくく

村上秀方著

萬葉集類系鈔

けハ万葉の類鈔のよめ成りて天竺の撰集
も歌人傳志 新考の初とくくくくくく
やうけくくくく作とこのめく人の位とす 小幸二冊

金雞先生戯編

久たうけ文庫

け書ハ先生萬葉のころより他もくくくく
系文序後編とあらゆるね文雅又まといれ歌
考とらるぬ子の初めに他文のたうりとす 全七冊

口書法作正編

校本古今和歌系

大字本全七冊

け書ハ古今和歌系とて切件とる例本居のよめりけ
大人の校とらるくくくくくくくくくくく
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

芝

山

あ
の
山

山

山

山

